

芭蕉の鳥類の句に関する考察

はじめに

「月日は百代の過客にして行きかふ年もまた旅人なり。」（『おくのほそ道 冒頭』）とするした芭蕉は、人生を旅と思つていたことは明らかである。本小論では、空を自由に飛びゆく鳥類に、芭蕉はいかなる思いを託したのかについて、西行の『山家集』とも比較対照しつつ考察したい。

新潮日本古典集成『芭蕉句集』を底本として、句番号も同書によつた。

一、年号別による芭蕉の鳥類の句

芭蕉は、何年に最もよく鳥類の句を詠んだのかを次に表示する。年号欄の○印内の数字は、年号別の合計句数である。

| 元禄<br>⑤ | 貞享<br>⑬ |     |     | 天和<br>⑤ |     | 延宝<br>③ |     |     | 寛文<br>① | 年号  |     |    |    |
|---------|---------|-----|-----|---------|-----|---------|-----|-----|---------|-----|-----|----|----|
| 二       | 元       | 四   | 三   | 二       | 元   | 三       | 元   | 八   | 六       | 五   | 十二  | 年  |    |
| 507     | 481     | 371 | 328 | 292     | 267 | 231     | 216 | 165 | 142     | 121 | 101 | 74 | 41 |
| 536     | 485     | 381 | 329 | 293     | 277 | 235     | 236 | 171 | 166     |     |     |    |    |
| 579     | 492     | 394 | 330 | 295     |     |         |     | 183 |         |     |     |    |    |
| 607     | 495     | 407 |     | 296     |     |         |     |     |         |     |     |    |    |
|         | 496     | 409 |     | 298     |     |         |     |     |         |     |     |    |    |
|         | 498     | 431 |     | 302     |     |         |     |     |         |     |     |    |    |
|         | 499     | 435 |     | 311     |     |         |     |     |         |     |     |    |    |
|         | 500     | 437 |     | 323     |     |         |     |     |         |     |     |    |    |
| 十二句     | 八句      |     | 十一句 | 二句      | 三句  | 一句      | 〃   | 二句  | 〃       | 〃   | 〃   | 〃  | 一句 |
|         |         |     |     |         |     |         |     |     |         |     |     |    | 合計 |

竹  
島  
智  
子

| 貞享→元禄⑧                          | 元禄⑨                         |                 |                 |                                 |                                 |
|---------------------------------|-----------------------------|-----------------|-----------------|---------------------------------|---------------------------------|
|                                 | 七                           | 六               | 五               | 四                               | 三                               |
| 924・933・934・949・950・959・966・969 | 843・854・860・868・894・901・918 | 797・816・827・831 | 754・760・761・786 | 693・697・698・701・721・722・750・751 | 610・635・651・654・658・666・673・675 |
| 八句                              | 七句                          | 〃               | 四句              | 〃                               | 八句                              |

以上、おくのほそ道の旅に出た元禄二年が十二句で最多数を占め、次いで、笈の小文の旅に出た貞享四年が十一句、元禄三・四年が各八句、元禄七年が七句である。鳥類の句は、貞享四年より激増し、元禄五、六年は各四句で少ないことが注目される。

①それでは、貞享三年迄に比し、貞享四年が、なぜこんなにも増加したのか。

②増加している中であつて、元禄五、六年は、なぜ少ないのか。の二点について論述したい。

③Aについて

貞享四年作の内、季節別では、

|   |                 |
|---|-----------------|
| 春 | 292・293・295・296 |
| 夏 | 298・302         |
| 秋 | 311             |
| 冬 | 323・328・329・330 |

となり、春と冬が各四句ずつで最も多い。

特に句数の多い春と冬の句は、次のとおりである。

292 鶴の巢も見らるる花の葉越し哉

山家

春

293 鶴の巢に嵐の外の桜哉

295 永き日も囀り足らぬひばり哉

296 原中やものにもつかず啼く雲雀

鳴海にとまりて

323 星崎の闇を見よとや啼く千鳥

282 鷹ひとつ見付けてうれしいらご崎

329 いらご崎似るものもなし鷹の声

杜国が不幸を伊良古崎に訪ねて、

鷹の声を折ふし聞きて

330 夢よりも現の鷹を頼もしき

貞享四年春は、「去来が江戸に来て芭蕉を訪れる。」とあるのみで、その他は特記すべき事項は見あたらないが、『莊子』の影響は、芭蕉の作句の深化において特筆すべき一大事であると思われる。

貞享四年当時の芭蕉は、291の句の詞書「物皆自得」や「養虫説跋」の「静かにみれば物皆自得す、といへり」とあるように、『莊子』の自然観が強く影響している。295の句も、自得の境地を深く見つめ、296の句にも『莊子』逍遙遊篇にもつながる天性

の自由の境地を見ている。このような心境が、春ののどかな風景と相俟つて、春の鳥の句が多数成つたのであろう。

貞享四年冬が多いのは、十月二十五日に江戸を出発し、東海道筋を帰郷の途に就き（笈の小文の旅）、十二月末、伊賀上野に帰り越年しているからであろう。323・328は『笈の小文』に見え、329・330も、328同様伊良湖崎で詠んでおり、この旅が契機となつて多数占めてゐる。

③について

①元禄五年二月十八日付 曲水宛書簡の「風雅三等の文」によつて、当時の俳諧がどのようなものであつたかが知れるが、同日付 珍碩宛書簡や五月七日付 去来宛書簡によつても明らかのように、江戸の俳諧は、浅ましくなり下がつたものとなつており、芭蕉の心痛は、想像に難くない。

②さらに、元禄六年三月下旬、猶子桃印が芭蕉庵で天折した。そのことを「此不便はかなき事共おもひ捨てがたく胸をいたましめ罷有候」（同年三月二十日〔推定〕付 許六宛）としるし、深い悲しみにくれた。

③また、「折く／＼指出（で）候而迷惑致候二付、益後閉閑致候。」（元禄六年八月二十日付 白雪宛）や、「当夏暑氣つよく、諸縁音信を断ち初秋より閉閑、二郎兵衛ハ小料理ニ慰み罷有候。夏中ハ筆をもとらず、書にむかはず、画も打捨て寝くらしたる計りニ御座候。」（元禄六年十一月八日付 曲水宛）とあるように、暑さのため老衰し、益過ぎから約一カ月門戸を閉じて入

々との対面を断つた。このため作句も当然少なくなつてくる。以上①～③によつて、元禄五、六年には、鳥の作句も少なくなつたものと推察される。

二、季節別による鳥類の句

次に、四季では、いつが多いのかを調査する。

| 季節 | 句番号 |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     | 合計  |     |      |
|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|
|    | 冬   | 秋   | 夏   | 春   | 1   | 2   | 3   | 4   | 5   | 6   | 7   | 8   |     |     |      |
|    | 666 | 101 | 658 | 121 | 701 | 496 | 247 | 11  | 754 | 296 | 41  | 610 | 293 | 295 | 三十三句 |
|    | 673 | 216 | 721 | 311 | 760 | 499 | 298 | 12  | 843 | 371 | 231 | 610 | 293 | 295 |      |
|    | 675 | 277 | 722 | 435 | 761 | 500 | 302 | 74  | 924 | 381 | 235 | 610 | 293 | 295 |      |
|    | 750 | 323 | 876 | 437 | 797 | 507 | 407 | 142 | 949 | 394 | 236 | 610 | 293 | 295 |      |
|    | 751 | 328 | 894 | 498 | 854 | 536 | 409 | 165 | 959 | 481 | 267 | 610 | 293 | 295 |      |
|    | 786 | 329 | 901 | 579 | 860 | 635 | 431 | 166 | 969 | 485 | 292 | 610 | 293 | 295 |      |
|    | 827 | 330 | 918 | 651 | 868 | 697 | 492 | 171 |     | 610 | 293 | 693 | 295 | 183 |      |
|    | 831 | 607 | 933 | 654 | 934 | 698 | 495 |     |     |     |     |     |     |     |      |
|    |     |     | 966 | 950 |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |      |
|    | 十六句 |     | 十七句 |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |      |

以上、夏が三十三句で最多数を占め、次いで春の二十二句、秋の十七句、冬の十六句となり、秋と冬とは大差ないことがわかる。鳥類の句に関する限り、芭蕉は、夏型の俳諧師であるといえよう。

二、季節別の鳥の名

句番号に○印のあるものは、一句中に二種類の鳥の名があるものである。

㊦春の句

| 鳥の名   | 句番号                        | 合計 |
|-------|----------------------------|----|
| 雁     | 41                         | 一句 |
| 鳥     | 231                        | 〃  |
| みそぎざい | 235                        | 〃  |
| 鶴     | 236・267                    | 二句 |
| 鶴の巢   | 292・293                    | 〃  |
| ひばり   | 295・296・381・ <sup>㉔</sup>  | 四句 |
| 燕     | 371                        | 一句 |
| 雉     | 394・ <sup>㉔</sup>          | 二句 |
| 鳥     | 485・924・ <sup>㉔</sup> ・969 | 四句 |
| 鶯     | 610・754・843                | 三句 |
| 衛     | 693                        | 一句 |
| 雀     | 949                        | 〃  |
| かうもり  | <sup>㉔</sup>               | 〃  |

単に、「鳥」とある句を除くと、「ひばり」が四句、次いで「鶯」が三句で多いが、十二種類の多数に及んでいることが注目される。

㊧夏の句

| 鳥の名   | 句番号  | 合計   |
|-------|--|------|
| ほととぎす | 635・247・11・697・298・12・760・407・74・761・409・142・797・492・165・854・496・166・950・499・171・500・183 | 二十三句 |
| 鳩の浮巢  | 302  | 一句   |
| 鶉舟    | 431  | 〃    |
| 木啄    | 495  | 〃    |
| 水鷄    | 507・868・934  | 三句   |
| 鶴     | 536  | 一句   |
| 閑古鳥   | 698  | 〃    |
| 雲雀    | 701  | 〃    |
| 鶯     | 860  | 〃    |

以上、「ほととぎす」が二十三句で最多数を占め、夏の句は九種類に及んでいる。「ほととぎす」をこんなにも多数詠んでいることが注目される。夏の句を多く詠んでいるのも、「ほととぎす」の句が多いことに起因していると思われる。

㊦秋の句

| 鳥の名 | 句番号                  | 合計 |
|-----|----------------------|----|
| 鳥   | 121                  | 一句 |
| 鶴   | 311・498              | 二句 |
| 鳴   | 435                  | 一句 |
| 雀   | 437・721              | 二句 |
| 鳩   | 579                  | 一句 |
| 鶉   | 651・ <sup>(72)</sup> | 二句 |
| 雁   | 654・658・901          | 三句 |
| 鷹   | <sup>(72)</sup>      | 一句 |
| 四十雀 | 816                  | 〃  |
| 五位鶯 | 894 (注1)             | 〃  |
| 鳥   | 918                  | 〃  |
| 棕鳥  | 933                  | 〃  |
| 渡り鳥 | 966                  | 〃  |

以上、秋の句は、「雁」が三句で最多数を占め、次いで、「鶴」「雀」「鶉」が各二句である。単に「鳥」「渡り鳥」となっているのを除くと、十一種類に及んでいる。

㊦冬の句

| 鳥の名 | 句番号         | 合計 |
|-----|-------------|----|
| 都鳥  | 101         | 一句 |
| 千鳥  | 216・323・666 | 三句 |
| 鶇   | 277         | 一句 |
| 鷹   | 328・329・330 | 三句 |
| 鳥   | 607・673     | 二句 |
| 鶯   | 675         | 一句 |
| 雁   | 750・831     | 二句 |
| 鳥   | 751         | 一句 |
| 雀   | 786         | 〃  |
| 鴨   | 827         | 〃  |

以上、「千鳥」と「鷹」が各三句で最も多く、次いで「鳥」「雁」の各二句である。単に「鳥」とあるのを除くと、九種類に及んでいる。

以上、四季を通じて、芭蕉は、「ほととぎす」を大変多く詠んでいることがわかる。「ほととぎす」については、『山の井』に、声をまつには、しびりをきらして、立花のかげにかしらをかたづけ、み、をすまし、うつら、うつ木のもとに日をく

らし、夜をあかすありさま、一夏のうちにきかぬ心を、無言の行をおこなふかとも、山籠して音信ざるかともいひなし、一声のめづらしきは金輪王の出世にもくらべ、をしの物いふにもなぞふ。又うづきにはねぶとなくとも、いくさみだれに名のるなどいひたて、雨の日はふりたて、なき、月夜にこはいろをかゞやかすともいひ、猶本尊かけたとも、不如帰ともなくにつけ、地獄にすむとも、鶯のかいこにまじるともいふ。

とあり、「一声のめづらしさ」を珍重されてきたようである。古来、「ほととぎす」は和歌などにもよく詠まれているが、芭蕉は、なぜこんなにも、「ほととぎす」に執着したのであろうか。次に、「ほととぎす」を詠んだ句について考察する。

#### 四、芭蕉の「ほととぎす」の句

- ①
- 11 岩躑躅染むる涙やほととぎす朱（寛文六年作）  
 12 しほし間も待つやほととぎす千年（ク）  
 74 待たぬのに菜売りに来たか時鳥（延宝五年作）  
 142 郭公招くか麦のむら尾花（天和元年作）  
 165 時鳥正月は梅の花咲けり（天和三年作）  
 166 清く聞かん耳に香焼いて郭公（ク）  
 171 時鳥鱉を染めにけりけらし（天和年間）  
 183 ほととぎす今は俳諧師なき世哉（ク）  
 247 鳥刺も竿や捨てけんほととぎす（貞享二年作）

#### ②

- 298 ほととぎす鳴く飛ぶぞ忙はし（貞享四年作）  
 407 須磨の海士の矢先に鳴くか郭公（元禄元年作）  
 409 ほととぎす消え行く方や島一つ（ク）  
 492 ほととぎす裏見の滝の裏表（元禄二年作）  
 469 田や麦や中にも夏のほととぎす（ク）  
 499 野を横に馬牽きむけよほととぎす（ク）  
 500 落ち来るや高久の宿の郭公（ク）  
 635 橘やいつの野中の郭公（元禄三年作）  
 697 ほととぎす大竹藪を漏る月夜（元禄四年作）  
 760 ほととぎす鳴く音や古き硯箱（元禄五年作）  
 761 ほととぎす鳴くや五尺の菖草（ク）  
 797 郭公声横たふや水の上（元禄六年作）  
 854 木隠れて茶摘みも聞くやほととぎす（元禄七年作）  
 950 鳥賊売の声まぎらはし杜宇（貞享元禄年間）

表現上、「ほととぎす」を第一句に詠んだのは十一句で、残り十二句は結句に詠んでいる。第一句よりも結句に詠む方が、やや多いが、ほぼ同数であることがわかる。

内容上、①滑稽を主眼とした談林調（247迄の句）及び②俳諧独自の新境地を試みた298以降の句とに二大別される。

#### ③について

#### 注2

11・12は共に縁語的発想によってできた句である。74は新古今集歌をもじり、伝統的美意識を滑稽化し、142も古歌をふまえ

て滑稽化している。165は正月の梅にかこつけ、166及び183は時鳥の声を賞美する心を大げさに表現した。171は「時鳥」と「鯉」を機知によって関連つけた。従って、これらの句は、ほとんど談林調である。247は貞享二年の作ではあるが、「刺棹書きたる扇に」と詞書があり、即興の画讃句である。

⑤ について

特に、697の静寂美及び496・499・797の爽涼感、さすがに芭蕉ならではの句境と思われる。それ以前の298では「忙はし」と、時鳥の本性を直叙した。407では、矢先と時鳥の声とは共に鋭く、哀調がある。409は穏やかな海上の風景がうかがえる。492では「裏見」に「恨み」、「裏表」に「あべこべ」の意を掛け、「裏」裏と韻をふんでおり、500は「高久」に「空高く」をきかせて、共にユーモアがある。635は、古今集歌で有名な橘の香りが記憶を蘇らせる契機となっている。760は、昔を偲ばせるという時鳥の声を「古き」にこめて掛けた。761は、古今集歌を換骨奪胎して「五月」を「五尺」に転じて余情がこもっている。854では、茶摘みの情景を「木隠れて聞く」と表現したおもしろさがある。<sup>注3</sup>950では、軽いユーモアがあり、晩年の軽みに通じる作品世界である。

なお、この区分は、貞享二年迄と貞享四年以降とに分けられ、その境界にあたる貞享三年春には、蕉風開眼と言われる「古池や」の句が見られることも一致している。

また、貞享元年夏は、188「南無ほとけ草の台も涼しかれ」と

189「忘れずば佐夜の中山にて涼め」の二句のみしか作っていない。同年秋に出発する『野ざらし紀行』の旅の準備に忙しかつたのかも知れない。さらに、「校本芭蕉全集」等を見ても貞享三年夏の作句は全く見られないことは不思議である。「芭蕉必携」(学燈社)などを見ても、貞享三年夏は特記事項がなくて不明である。

### 五、芭蕉文集における鳥類の表現

次に、新潮日本古典集成『芭蕉文集』を底本として、芭蕉が散文において、鳥類をどのようにとらえているか、制作年次順に列記して、側面より見たい。便宜上、A、B、Cを付記する。

A 骨山といふは鷹を打つ処なり。南の海のはてにて、鷹のはじめて渡る所といへり。伊良湖鷹など歌にも詠めりけりと  
思へば、なほあはれなる折ふし、  
鷹一つ見付けてうれし伊良湖崎

(『笈の小文』貞享四、五年)

B 錦床の夜の褥の上には、鴛鴦をぬひものにして、二つの翼にのちの世をかこつ。

(『紙衾の記』元禄二年九月上旬)

C 頃日はほととぎす盛りに鳴きわたりて人々吟詠、草扉におとづればべりしも、蜀君の何某も旅にて無常をとげたとこそ申し伝へたれば、なほ亡人が述懐、草庵にしてうせたることも、ひとしほ悲しみのたよりとなれば、ほととぎす

の句も考案すまじき覚悟に候ところ、愁情なぐさめばやと、杉風・曾良、「水辺のほととぎす」とて更にすすむるにまかせて、ふと存じ寄り候句、

ほととぎす声や横たふ水のう上

と申し候に、また同じ心にて、

一声の江に横たふやほととぎす

(元禄六年四月二十九日付 宮崎荊口宛書簡)

以上、Aは「鷹一つ」の句、Cは「ほととぎす」及び「一声の」の句を作成する経緯を散文によつて明らかにしている。Bは、『長恨歌』をふまえて、「鴛鴦をぬひものにして」により、夫婦仲のむつまじいことにたとえてゐる。

六、『山家集』における鳥の歌

芭蕉が敬慕した西行の『山家集』の鳥の歌を調査して、芭蕉と比較対照したい。新潮日本古典集成『山家集』を底本とする。季節欄の○印内の数字は、それぞれの合計歌数である。

| 春②                   |       | 季節    | 鳥の名  | 歌番号 | 合計  |
|----------------------|-------|-------|------|-----|-----|
| 鴛鴦                   | 雉子    | 鶯雁    |      |     |     |
| 16・24・30・41・42・61・70 | 31・34 | 46・48 | よぶこ鳥 | 49  | 十三首 |
| ・91                  |       |       |      |     | 四首  |
|                      |       |       |      |     | 三首  |
|                      |       |       |      |     | 一首  |

| 冬①  |             |     | 秋①  |     |     | 夏②  |             |     |     |     |         |                  |
|-----|-------------|-----|-----|-----|-----|-----|-------------|-----|-----|-----|---------|------------------|
| 鴛鴦  | 千鳥          | すずめ | 雉子  | 鷹   | 鳴   | うづら | 雁           | 鶏   | 雲雀  | 水鶏  | 郭公      | 郭公 <sup>注4</sup> |
| 560 | 548・553・562 | 535 | 524 | 523 | 470 | 425 | 366・419・424 | 363 | 238 | 232 | 179・200 | 169              |
| 一首  | 七首          | 一首  | 一首  | 一首  | 一首  | 一首  | 七首          | 一首  | 一首  | 一首  | 二十二首    | 一首               |

芭蕉は、鳥の内でも「ほととぎす」が最多数を占めていたが、西行も同様であることが興味深い。『山家集』所収の鳥の歌六十八首中、「郭公」は二十四首の最多数で、約35%の比率を占めている。『山家集』において、季節別では、春は鴛、夏は郭公、秋は雁、冬は千鳥を多数詠んでいる。芭蕉は、鴛、雁、千鳥を西行ほどには詠んでいない。また、芭蕉は、多種類に及んでいるが、西行の『山家集』は、春四種類、夏三種類、秋四種類、冬五種類と、各々少ない。



次に、最多数を占めている『山家集』のほととぎすの歌について考察する。

ほととぎすの初音が珍重されたことは、

無言なりける頃、郭公の初音を聞きて

179ほととぎす人に語らぬ折にしも初音聞くこそかひなかれ  
によつても明らかである。

ほととぎすを待つ思いは、

郭公

182わが宿に花橘を植えてこそ山ほととぎす待つべかりけれ

183たづぬれば聞きがたきかとほととぎす今宵ばかりは待ち

ころもみん

184ほととぎす待つ心のみ尽くさせて声をば惜しむ五月なりけり

人に代りて

185待つ人の心を知らばほととぎすたのもしくてや夜をあかさ

まし

郭公を待ちて空しく明けぬといふことを

186ほととぎす聞かで明けぬと告げ顔に待たれぬとりの音を聞

ゆなる

189待つことは初音までかと思ひしに聞きふるされぬほととぎすかな

によつて明らかである。「ほととぎす」の歌二十四首中、「待つ」を一首中に詠みこんだのは、以上六首あって、25%の比率を占めていることがわかる。

一方、芭蕉の「ほととぎす」の句二十三句中、「待つ」及びその活用語を一句中に詠みこんだのは、既述のとおり、12・74の二句のみである。12は寛文六年作、74は延宝五年作で、初期の作品に限られている。以後、芭蕉は、ほととぎすを待つという伝統的な和歌世界を一步ふみこんで、俳諧独自の世界を構築したものと考えられる。これは、延宝六年または七年、芭蕉は、正式の俳諧宗匠立机のための俳諧万句を興行し、俳諧師としての道を行つたこととも関連があるう。

おわりに

以上、本小論においては、まず、芭蕉の鳥類の句は、貞享四年より激増し、元禄五、六年は少なくなっていることの理由について考察した。次に、鳥類の句に関して、芭蕉は夏型の俳諧師であること、「ほととぎす」を詠んだ句が最多数を占めることをしるした。さらに、西行においても、「ほととぎす」の歌が最多数を占めていたことが、興味深い。

また、芭蕉は、鶯、雁、千鳥を西行ほどには詠んでいない。ほととぎすを待つという内容の芭蕉の句は、延宝五年迄の初期に限られており、以後、芭蕉は、伝統的和歌世界から俳諧世界へと脱皮をはかったと考えられ、延宝六、七年の俳諧宗匠立机

とも関連があると思われる。

### 注

#### 1 894 稻妻や闇の方行く五位の声

については、『連歌俳諧研究』第七十五号所収 今 栄蔵氏「暁台王催蕉翁百回忌法会と芭蕉真蹟懷紙」に、「非の打ちどころのない芭蕉の真蹟」として報告されている。

#### 2 11・12の出典『続山井』の所収の

蟬の経に本尊かけよ郭公 湖春

或人興行に

下種(種)近うとへや雲井の郭公 季吟

など、他の作者に比し、芭蕉が特に秀れているというほどのことはない。さらに、談林俳諧の『誹諧東日記』を見ても、同様のことがいえる。

また、11の句について、赤羽 学博士は、「寛文六年芭蕉二十三歳の折の作で、同年四月二十五日に他界した主君藤堂良忠(俳号蟬吟)の追悼句ではなかったかという私見は、既に他にも同様な指摘があり、ほぼ正鵠を得ているのではないかと思われる」(『芭蕉俳句鑑賞』p.26)と、記載されている。

#### 3 この句の制作年次については、「元禄七年」(日本古典全

書『芭蕉句集』頼原退蔵校注、「元禄七年か」(日本古典文学大系『芭蕉句集』大谷篤蔵校注)、「恐らく晩年、元禄五・六・七年頃の作と思われるが、芭蕉生前の集に見えず、年次推定の根拠を欠く」(『校本芭蕉全集』荻野 清・大谷篤蔵校注)などと記載されており、最晩年の句であろう。

4 郭公は、本来夏を代表する鳥であるが、この歌には、「春のうち」に郭公を聞くといふことを」と、詞書があり、春にほととぎすを聞く喜びを詠んでいる。